

## 柳川大会印象記

大野晃

「村落生活の変化と現状」という共通課題は昨年度の津和野大会を引

きついものであったが、本年の柳川大会では「農民にとって生活破壊とは何か」から「その主体的再編成をめぐって」というように農業危機の深化の進められるなかで「破壊」から「主体的再編成」へと問題が掘り下げられるかたちで行なわれた。

大会では十五・十六日の二日間に自由報告、課題報告がそれぞれ三本発表され討論が深められた。各報告についての討論の経過並びに論点の整理等についての詳細は年報に掲載されるのであるから、ここでは一参加者としての大会の主観的印象を述べることにする。

自由報告の部では、田原会員の「現代フランス農村社会学の動向」が先ず報告されたが、いうところの「ナンテール学派」の創設者がルフェーブルであることを知り、日頃疎外論でしか知らないかったルフェーブルの新たな側面を認識し、不勉強を反省させるとともに新鮮さをもつて報告を聞くことができた。高山会員は「西ドイツにおける農政の転換と地域政策」について六〇年代後半から七〇年にかけての新しいデータにもとづいた報告がなされた。戦後の西独における農村地域では農業構造改善事業の推進により六〇年前後には「村落」がかなり「混住化」を深めており、この「混住化」の現状をふまえて、ハーノバーツ技術里科大学教授コンラッド・メイヤーが「西独における農村地域の再整備——地域計画及び地方開発の基本と課題」(全国農業構造改善協会刊、一九六七年)で「村落再整備」の必要を詳細に論じているが、それをうけたかたちで一九六五年四月に連邦地域整備法が出されている。一九六八年六月の「連邦政府の農業政策に対する作業計画」が「戦後西ドイツにおける農政上の一つの段階を画したものである」という高山会員の指摘は

かかる経過の中で明瞭に理解される。農業法農政から選別的総合農政への転換がはかられるなかで、そこに必然化する農村地域整備の課題は西独においても根の深いものであろう。無秩序な農村の「都市化」、スプロール化がすすむわが国の現状にあって西独における「村落」の位置づけと方向づけについての報告は示唆に富るものであった。願わくば「村落再整備」に関する具体策をもう少し聞けたらと思ったのであるが時間的制約上やむをえなかった。本間会員の「羽州庄内における近世後期の農村の荒廃と復興」についての報告は、近世後期の封建的土地所有の解体期における庄内の農村の荒廃が多数の漬百姓を発生させ、不耕作地が増加するなかで共同体の機能低下が引き起されつつも庄内藩の主導による復興策によって「一應の農村の安定を確保」されるという経過が述べられた。歴史にうとい私には資料・史料による説明があれば一層ゆきとどいた理解がえられたようと思ふ。

課題報告の部ではこれまでの共通課題についての四回の研究会の報告と討論をふまえて「主体的再編成」を中心にして山本会員らの福岡県糸島郡と大分県耶馬渓町を事例とした「都市近郊農村における集落機能と農業の農民による主体的再編成について」、岩崎会員の和歌山県有田市千田東地区を事例とした「『みかん危機』下の農村生活の変化と現状」、佐藤非会員の岩手県紫波町吉和地区を事例とした「村落の主体的再編と農業協同組合の機能」についてそれぞれ厖大な調査資料にもとづいての熱のこもった報告がなされた。

主体的再編の内実を現状分析により明らかにしていくとする場合、当然のことながらそのよりどころを何に求めるかは報告者の分析視角と

素材の置かれている状況、『都市化』、『混住化』の進展度とで異なるであろう。山本会員は「集落」のもう伝統的な機能を外部からの混住者をそこに取り入れつつ維持することにより、『小農』生産の維持をばかり、そこから主体的再編を考えようとして、岩崎会員は農民層の分解を基底に置きつつ「生産と生活」を守る視点から「自治会」の機能を媒介に現状変革の主体的再編を展望しようとしているように思えた。佐藤非会員は現状の『村落』が固有資の段階で歴史的共同体とは異なる性格をもつものであるという認識に立って村落の在り方に果してきた「農業協同組合」の機能を連続と断絶の総体として再考し、それを媒介に主体的再編を考えようという極めて説得力のある報告がなされた。これら三者の報告のなかで九州を素材とする山本会員が「集落」に、東北を素材とする佐藤非会員が「農業協同組合」にそれぞれ主体的再編成のよりどころを求められたわけであるが、この二者においては素材の対照性すなわち、西南農村と東北農村という対照性と現状の『村落』の理解をめぐる対照性すなわち、前者の超歴史的把握と後者の歴史的把握という方法論上の対照性とが浮き彫りされ興味深かった。討論ではこの対照がパラレルのままにクロスする方向で論議されなかつた感があり、私のような若い会員にはいささか欲求不満が残つた。

西南農村—集落—超歴史的把握と東北農村—農業協同組合—歴史的把握（これは私の勝手な主観的整理である）という連関は偶然的なものであらうが、戦後自作農体制の崩解がさけばれるなかで、ひるがえつて西南型農村と東北型農村という類型構成の問題と近畿段階と東北段階とう生産力段階の問題、「類型と段階」の交錯の問題を再検討する契機を

与えられたようだと思つ。類型と段階のクロスするダイメンションで現状の村落の「変化と現状」を考えつそこから主体的再編成をみようとするはどうなのであらうか、「現状と展望」がえられるのであらうか、そんなどことをばく然と考える。ともあれ「現状と展望」を掘りさげる意味で農村自治論の展開に期待したい思いである。

最後に本大会で気づいたことを、一二挙げておく。一つは報告者の資料が足りなかつたことである。昨年につづく百名を越えての大会で大変よろこばしいことである。その為に生じたことであろうと思う。次年度の大会では各報告者は各部の資料は用意する必要があるのでなかろうか。第一は報告の最中に電気カミソリの騒音が流れ参加者として気になつた点である。報告者へのマナーの問題でもあり留意していただきたいと思う。また、西尾会員の急病で「地租改正前後ににおける村落構造の変化に関する一考察」という興味深い報告に接することができなかつた。

一日も早く健康を回復されることを祈ることとともに、次年度の大会で報告されることを願う次第である。

白秋の里柳川で大会を準備された九大の皆さんと東京女子大の事務局に感謝致します。とても楽しい三日間を過ごすことができました。